＜幼稚園教育＞

心豊かに充実した園生活を送るための工夫

～絵本の読み聞かせと関わった表現活動を通して～

豊見城村立座安幼稚園教諭　赤嶺優子
指導講師　糸満市立糸満幼稚園教頭　里　秋美

内容要約

一人ひとりの幼児が充実した園生活が送れるようになるには、対人関係がうまくなることである。それには、自分の思いや考えを相手に伝える等の言葉による意思の伝達を図ることである。その手段として絵本の読み聞かせ方を工夫し、心豊かな幼児を育て、表現活動を通して自己表現できる幼児を育てることである。家庭と連携を取り、幼児の心が安定すると意欲的に活動に取り組む姿がみられる。さらに魅力的な環境が活動意欲を高める。

【キーワード】人間関係、豊かな心、自己表現、自己実現、信頼関係

目　次

Ⅰ　テーマ設定理由 …… 11

Ⅱ　研究仮説 …… 11

Ⅲ　研究の全体構想図 …… 12

Ⅳ　研究内容 …… 13
　1　絵本の役割 …… 13
　2　心の豊かさ …… 13
　3　幼児教育における心の豊かさ …… 14
　4　充実した園生活を送るための指導方法 …… 15

Ⅴ　保育実践 …… 16

Ⅵ　研究のまとめ …… 19

Ⅶ　研究の成果と今後の課題 …… 20

＜幼稚園教育＞

心豊かに充実した園生活を送るための工夫

～絵本の読み聞かせと関わった表現活動を通して～

豊見城村立座安幼稚園教諭　　赤　嶺　優　子

Ⅰ　テーマ設定理由

核家族化が進み少子化傾向が見られる現在。幼児も親も対人関係が希薄になっている。

日常生活において親たちは、心のゆとりを失った生活に追われ、絵本を読んであげるより、ビデオでも見せておけばいいと安易に考えている。

幼稚園教育目標に「日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり、聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること」と明記されている。

絵本は、幼児と親との触れ合いやコミニケーションを育て、情緒の発達を促し、豊かな感性を育成する。

それらは絵本の読み聞かせをすることによって、より効果が期待できる。ところが、最近、その絵本の良さが忘れられがちになっている。

幼児期において、「心の豊かさ」とは、喜び、楽しみ、悩み、苦しみをお互い共有することによって、心の交流を深めることである。困っているとき、温かい言葉をかけてもらったり、自分のことを理解してもらったりすると、うれしいものである。

このごろ、園において、一人遊びをする幼児が増えている。また、友だちを恐がり、職員室を教室替わりにしている幼児もいる。それに、自分が思っていること、考えていること、言いたいことも言えず、職員室で時間を過ごしている幼児もみえる。

なかには、ままごとをやりたいのに「入れて？」。頭が痛いのに「痛い！」。と言えずに、もじもじして、自分の思いを身体でも表現できないで困っている幼児もいる。

さらに、気になるのは、友だちが転んでしまっても「だいじょうぶ？」と心配する言葉より、笑い声が先に聞こえてくる現象がある。これでは、「心豊か」とは言えない。

これまでに、心が豊かに育ち、友だちとうまく関わり合えるようにと願いを込め、絵本を中心に読み聞かせをやってきた。しかし、よそ見をしたり、いたずらをしたりで聞いている幼児は少なかった。読み聞かせ方の工夫が、十分でなかったような気がする。

これからの改善の目安として、幼児の心に響くような、絵本の読み聞かせ方を工夫しなければならない。

そのためには、ただ単調に読むのではなく、幼児がわくわくどきどきするなど、興味・関心を抱くような読み方に努める。

また、壁面を活用して、聞きたくなるような、遊びたくなるような環境構成にも努めたい。

このように、さまざまな工夫をすることにより、興味や関心が高まり、語いも豊富になることが期待できる。

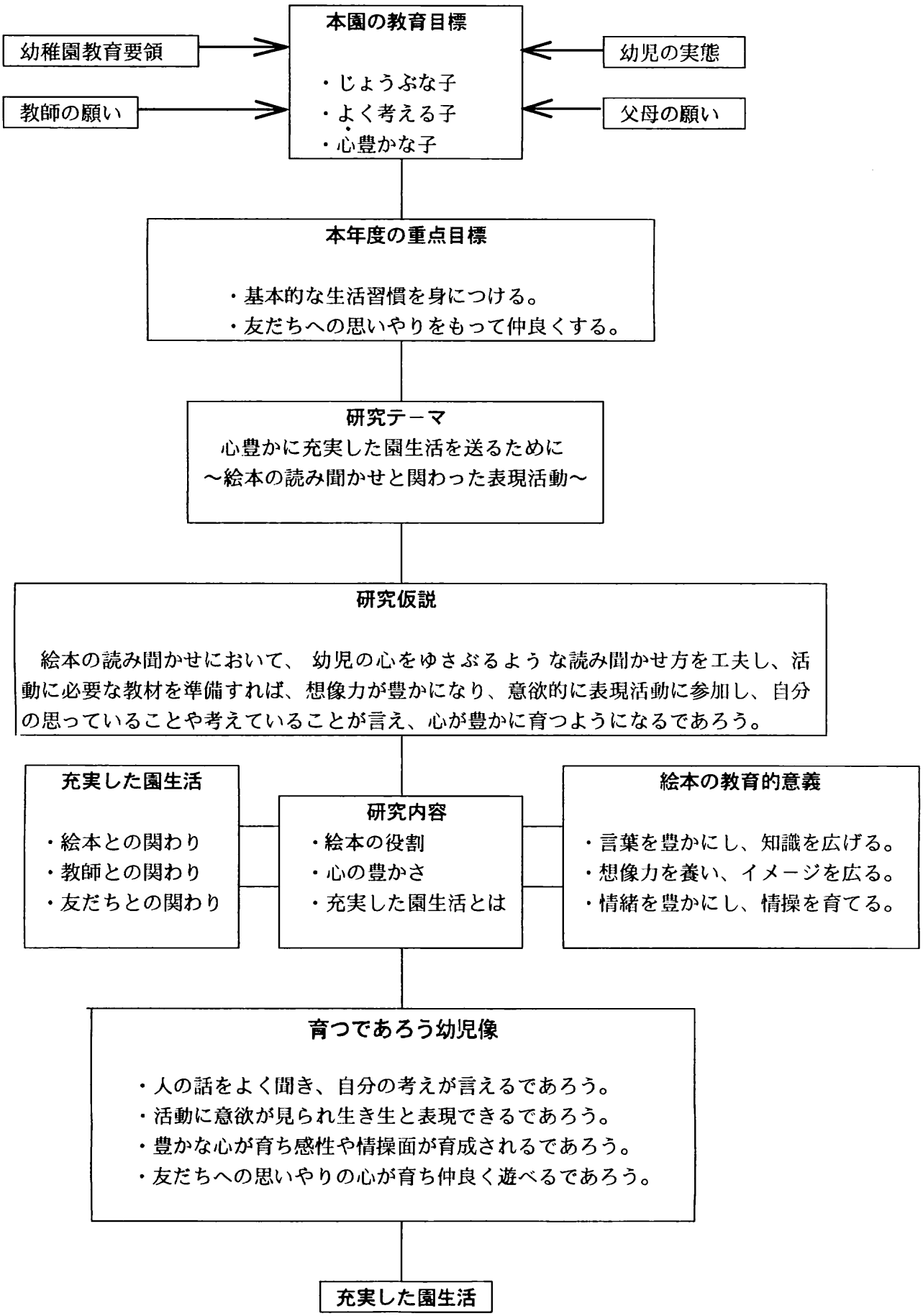
そうすることで、絵本の内容にもよるが、幼児は、いつのまにか絵本からとび出して、その役になりきって遊びだしてくる。そして次第に、表現活動や劇遊びへと意欲的に活動に取り組み、友だちと関わり、自分の思いや考えていることがが言えるようになり、自己表現ができるようになると考える。

幼児が豊かな感性を身につけ、友だちと仲良く遊べるようになれば、次第に園が楽しくなり、自分の思いや考えが言え、充実した園生活を送ることができるようになると考え、本テーマを設定し研修を進めていくことにした。

Ⅱ　研究仮説

絵本の読み聞かせにおいて、幼児の心をゆさぶるような読み聞かせ方を工夫し、活動に必要な教材を準備すれば、想像力が豊かになり、意欲的に表現活動に参加し、自分の思っていることや考えていることが言え、心が豊かに育つようになるであろう。

Ⅲ　研究の全体構想図


本園の教育目標
・じょうぶな子
・よく考える子
・心豊かな子
幼稚園教育要領
教師の願い
幼児の実態
父母の願い
本年度の重点目標
・基本的な生活習慣を身につける。
・友だちへの思いやりをもって仲良くする。
研究テーマ
心豊かに充実した園生活を送るために
～絵本の読み聞かせと関わった表現活動～
研究仮説
絵本の読み聞かせにおいて、幼児の心をゆさぶるような読み聞かせ方を工夫し、活動に必要な教材を準備すれば、想像力が豊かになり、意欲的に表現活動に参加し、自分の思っていることや考えていることが言え、心が豊かに育つようになるであろう。
充実した園生活
・絵本との関わり
・教師との関わり
・友だちとの関わり
研究内容
・絵本の役割
・心の豊かさ
・充実した園生活とは
絵本の教育的意義
・言葉を豊かにし、知識を広げる。
・想像力を養い、イメージを広る。
・情緒を豊かにし、情操を育てる。
育つであろう幼児像
・人の話をよく聞き、自分の考えが言えるであろう。
・活動に意欲が見られ生き生と表現できるであろう。
・豊かな心が育ち感性や情操面が育成されるであろう。
・友だちへの思いやりの心が育ち仲良く遊べるであろう。
充実した園生活

Ⅳ　研究内容

1　絵本の役割

(1)　絵本の読み聞かせの意義

幼児が充実した日々を送ることができるように、環境を整えてあげることは大切である。

言葉は、幼児期において、人と関わるコミニケーションの手段である。この時期に、人と言葉を交わす楽しさを味わわせ、言葉の発達を促していくことに努めなければならない。

園生活の中で、教師や友だちと充実した日々を送り、自分の思いや考えが言えるようになる方法の一つとして、絵本の読み聞かせがある。

絵本は、言葉を豊かにし、想像力を伸ばし、イメージを広げる。さらに、知識を広げ、情緒の発達を促し、豊かな感性を磨き上げる教育的効果も期待できる教材である。そして、望ましい人間関係やものの見方、考え方の基礎となる。

(2)　絵本の選び方

幼児期は、生活経験も浅く、これからいろいろなことを身につけていく時期である。

幼児にとって絵本は、日常生活の中で経験や知識を通して共感できるものである。だから、発達に即した絵本であることが望まれる。また、感性が豊かに育つ時期なので、想像力を豊かにしていくものを選ぶ。想像していく中で、喜び、楽しみ、悲しみ、驚きなどの感情が喚起される絵本であると情操教育にも役に立つ。

さらに、好ましいイメージがもりこまれ、美しい言葉、余韻のある言葉が使われ、色彩が美しく鮮明であることも選定の条件の一つである。

ページをめくっていく中で、それがどうなっていくかを楽しんだり、話の内容や筋のおもしろさにひかれ楽しめる絵本が好ましい。

友だちと一緒に見ることで、共通のイメージをもち、遊びに膨らみを持たせる絵本も好ましいものである。

(3)　読み聞かせの改善方法

絵本との出会いを大切にし、もっともよいかたちで読み聞かせをしてあげ、心に栄養をつけてあげるために、次のような工夫をする。

①　心に響く絵本の読み方の工夫

ア　その作品に登場する人物が「だれの目」から捉えらえられているか視点を定める。

イ　読み手の立場から、登場人物の姿と行動や描写のイメージ作りをする。

ウ　登場人物の特徴がよく理解できるように、声の出し方、抑揚、間の取り方、読み方の速度、イントネーションに気をつける。

エ　読み手と聞き手の、心の通いを大切に、聞き手が登場人物になれるような読み方をする。

オ　絵本の読み聞かせを進めていく中で、幼児の反応を見ながら、次の場面はどうなるかなど、スリルとサスペンスを盛りあげていくような読み方をする。

②　視覚を通しての読み聞かせ方の工夫

ア　壁面などを利用して、聞きたくなるような環境構成に配慮する。

イ　市販の絵本だけにこだわらず、手作り教材、大型絵本などを活用して、マンネリ化にならないようにする。

2　心の豊かさ

人間性豊かな心を心の豊かさと捉える。

国語辞典によると、人間とは「人間の本性」「人間らさ」と、記されている。

人間性という言葉は、日常生活においてもよく使われている。人の行為を見ていると「あの人は、人間性がにじみ出ている」。「あまり人間性が感じられない」。などと言ったりする。

人間性とは、「その人らしい」人間としての心と捉えることができる。そして、人間性豊かな心とは、「自分の人間としての生き方を真剣に見つめる心」。「他人を思いやる心優しさ」。「相手の立場になっ

て考えたり、共感することのできる温かい心」。また「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性」。「正義感や公平さを重んじる心」。「命を尊び大切にする心」。「みんなのために進んで頑張ろうとする寛大な心」。である。「心豊か」とは、優しくて、素直で、寛大な心なのである。

3　幼児教育における心の豊かさ

幼児期は、心の教育の基礎づくりの大切な時期である。この時期に周囲の人、物、自然とかかわる中でおもしろさ、厳しさ、優しさ、楽しさ、思いやりなど、さまざまな感情体験をする。

幼児は、活動しながら何かを感じ、考えながら行動する。そして、自分の思いや考えを言葉を通して相手に伝えることができる。

教師は、幼児がどのような活動の中で、どんな経験をしているかを見守り、豊かな感性が育つように援助すべきである。絵本の読み聞かせもその一つである。

また、幼児は地域社会の中で生活している。地域の人々と共に教育していくことも忘れてはならない。

幼児教育における心豊かな幼児の育成は、幼児と共に生活している親、幼児の人格形成を目的としている園の教師、そして、地域の人々との三者の連携で行われなければならない。

このように、幼児は、父母や周りにいる人々の温かい愛情に支えられながら心が豊かに育ち、人格形成が図られるのである。

(1)　教師との信頼関係に支えられた生活

人間は、喜怒哀楽の感情を持っている。

園生活の中で、幼児は友だちと教師との信頼関係ができてくると、喜びや楽しみを倍にし、悩みや苦しみを分かち合えるようになる。その積み重ねが、人間としての心の交流を深める。そのために教師は幼児の活動に積極的に関わることである。

例えば、読み聞かせの場面で、みんなが同じ絵本を読んでもらったことで、活動に共通のイメージができ、自分なりに、いろいろなことを想像し、思考の世界をもつことができる。そして、自分の思いや考えを伝え合うことで内容に広がりと深まりが見られてくる。

そのとき、物事の善し悪しや、自分の身のふりかたを考えさせられることもある。そんなとき、どうしたら良いのか話し合い、解決方法を相談することができる。

教師が、幼児を様々な課題にむかわせる中で、喜んでいるのがいれば、共に喜ぶ。悩んでいるのがいれば、親身になって聞いてあげる。手助けが必要なときは援助をする。そうすると、お互いに人間的な心の交流が深まってくる。

幼児は、自分を守り、受け入れてくれる教師を信頼する。人間は、困っているとき、悲しいとき、苦しいとき温かい言葉をかけてもらえると嬉しいものである。

(2)　友だちと関わって展開する生活

幼児期は、他児の存在に気づき、友だちと遊ぶ楽しさを知る。

友だちと関わり生活をしていくことで、自分の存在を確認し他児との違いに気づく。集団生活の中で、お互いに刺激し合い、思いやりの心や自律性、協調性、協力、社会性などが身についてくる。

さらに、会話を通して友だちを理解していくことができてくる。いろいろな活動に対して興味や関心をもつようにもなる。そして、遊びにも意欲が見られ、共通の目的に向かって進めていく遊びグループができてくる。

共通のイメージをもち、活動を進めていくなかで幼児は、友だちと関わって遊びを展開していく楽しさに気づいてくる。

(3)　家庭や地域との連携

社会の一番小さい単位である家庭は、家族という絆で結ばれ、幼児にとって安心して生活できるいこいの場所である。

家族で一緒に食事をしたり、今日の出来事について話し合ったり、絵本を読んでもらったり、お風呂にはいったりして、温かいぬくもりがある。家庭環境から人間らしい心の育ちが見えてくる。

人間的触れ合いや信頼関係は、日ごろの生活を通して育まれる。心豊かな人間性の育成は、家庭教

育が鍵をにぎっている。

幼児の豊かな心を育てるための基盤となるものは、父母をはじめとする家族の深い愛情であり、家庭生活のあり方が、園生活にも大きく影響する。幼児が安心し、落ち着いて園生活を送るためにも、教師は、家庭と連絡を密にして、信頼関係を保つことが必要になる。

また、地域における生活経験も園生活に広がりをみせ、幼児の人格形成によい影響を与える。保護者に対し、絵本についてのアンケートをとった。ほとんどの家庭において児童館や図書館から絵本を借りて、読み聞かせをしている。地域の施設を有効に利用しているのである。また、児童館のサークル活動などは、父母の情報交換の場所にもなっている。

さらに、子ども会などの活動は、地域の人々と交流を深めながら、多様な感動体験を得ることができる活動団体である。地域におけるいろいろな活動に参加し、感動体験を豊富に味わわせ、感性を磨き、心豊かに育ってほしい。

この時期に、多様な環境と関わり、何かを感じ、考えて得た実感や感動は、幼児にとって生涯、心の栄養としてはたらき続けるからである。

＊アンケートの結果

絵本の入手方法 （地域の施設利用）	絵本の読み聞かせ （家庭）	なぜ絵本を読むのか （絵本の意義）
家にある絵本を読む・・・40％	母・・・・・・60％	親子のスキンシップ。想像性をつける。 情緒が豊かになり思いやりの心が育つ為。
図書館や児童館で借りる・50％	父・・・・・・25％	感性や感受性が豊かに育つ為。間接経験。 理解力が増し教科に興味を持つ。言語理解
月刊誌をとっている・店で買う ・10％	祖父母・兄弟 ・・・・15％	知識が広がる。文字指導。心の成長を望む。 幼いころ自分が読んでもらえなかったので。

4　充実した園生活を送るための指導方法

充実した園生活とは、適切な環境の下で、やりたいことが思う存分でき、楽しく過ごせることである。

(1)　充実した園生活の捉え方

①　充実した園生活を送るための留意点

ア　幼児の心を読みとり、思いや考えを聞き幼児を理解する。

イ　共に育つ喜び、楽しみ、悲しみ、思いやりの心を育てる。

②　充実した関わりの中で育つもの

ア　感動、体験を通して心情、意欲、態度を育てる。

イ　達成感、挫折感、葛藤を通して対人関係を育てる。

(2)　遊びを通しての総合指導

幼児期の生活のほとんどは遊びである。園における教育は、遊びを通して総合的に指導している。

例えば、絵本の読み聞かせから、表現遊びまでの過程を考えてみると、絵本を静かに聞く態度が身についてくる。さらに、絵本の内容に関心を持ち、表現遊びをやってみたいという意欲がわいてくる。

すると、幼児は、自然に身体が動きだしてくる。友だちと同じ目的にむかって表現遊びを進めていく中で配役を決めたり、どのような内容にしていくか相談し、友だちとコミニケーションをとろうとする動きが見られてくる。ときにはけんかをすることもある。でも、自分の思いが相手に分かってもらえるように、表現し相手に理解を得ようとする。友だちとコミニケーションをとりながら同じ目的に向かって活動に意欲がわいてくる。

そこで、自分たちで遊びを計画し、調整する。自分の思い通りの配役になれないときもある。しかし、自己抑制し自己中心的な考え方から、相手の立場になって行動しようとする姿勢が身についてくる。

これらの過程の中で幼児は、達成感、充実感、葛藤などを味わい、心身共に成長してくるのである。

さらに、社会性、道徳性、協調性も培われてくる。

このように、一つの遊びを展開していく中で、幼児はいろいろな経験をし学んでいる。遊びの中で幼児の姿を多面的に捉え、必要な経験ができるように環境を整えてあげることである。

幼稚園教育は総合学習なのである。教師にとって、幼児の主体的な遊びを大切にとりあげ、いろいろな活動に対応していけるような総合的指導力が求められる。そして、常に幼児の遊びの展開に留意し、適切な指導ができるよう研究していくべきである。

(3) 幼児理解にもとづいた援助の工夫

幼稚園教育は、環境を通して行う教育である。一人ひとりの幼児理解にもとづく教師の人的影響も環境となる。

教師は、幼児と共に生活していく中で、思いや、気持の内面を理解し、一人ひとりの状況に応じた援助が必要となってくる。

例えば、弁当の時間、食事が終わり次第、弁当箱をハンカチに包む活動がある。日ごろは、自分で包むことができる幼児が、母親が病気のときは、愛情不足のためか教師に手伝ってほしい素振りをする。そんなときは、気持ちに応えてあげることが一人ひとりの実態に応じた援助となる。

幼児は、それぞれ家庭環境や生活経験も異なっている。一人ひとりをよく見つめ、その状況を理解し、幼児の心の動きに寄り添い、幼児と同じ気持ちをもち援助していくことが大切である。

さらに、園は、集団の教育力を生かす場でもある。「Aさんが、なわとびがとべるのなら、私もとんでみたい」という心の動きがみられる。

集団生活の中でお互い影響し合い、刺激しあって生活している。そんなとき、教師が助言や援助をしてあげると、さらに、意欲的に活動する傾向がみられる。このように、一人ひとりの幼児を理解しタイミングに応じた援助の仕方が大切となる。

V　保育実践

1　活動名

絵本からとび出して遊ぼう。グリム童話「おおかみと七ひきのこやぎ」

2　活動設定の理由

(1) 教材観

グリム童話「おおかみと七ひきのこやぎ」は、幼児が興味・関心示す絵本である。

この教材は、読み聞かせを工夫することで、幼児の生の声を大切に、会話を楽しむことができる。こやぎたちとおおかみの言葉のかけあいの中で、おおかみが、こやぎたちのお母さんになりきるために、白い手足にやさしいお母さんの姿に想像力をかきたてる。

また、教師がお母さん役になったり、おおかみの役になったりして、いろいろな言葉かけをすることで、自然に会話ができるようになる。そうすることによって、次第に幼児が、自分の言葉で言えるようになり、さらに、意欲的に表現活動に参加することが予想される。また、この絵本の最後は、井戸に落されたおおかみで終わっている。

もし、おおかみが自分の悪かったことに気づき、あやまったらどうするかや、みんなと仲良く遊ぶにはどうしたらいいか話し合える絵本でもある。悪いと思ったらあやまる。あやまったら許してあげるなどの人間的な触れ合にも迫っていける教材でもあると思われる。

幼児の心をゆさぶるような、読み聞かせを工夫することで、想像力を豊かにし、自分の思いや考えていることが言え、意欲的に表現活動に参加させるなどの技能と能力を身につけさせる教材である。

(2) 幼児観

父母に絵本についてのアンケートをとりまとめた。すると、90%以上の家庭において10分から20分程、絵本の読み聞かせをやっていることがわかった。父母の中にも絵本は、幼児にとって大切であることはよく認識されている。また、読み聞かせを通して想像力が豊かになることや、感性や感受性が育ち思いやりの心が育てられるという絵本の良さを感じていることも伺えた。しかし、絵本を読み聞

かせた後、どのように対応していいのかわからないでいる、父母が多かった。

幼児に親しまれ、よく知っている本の中に「おおみと七ひきのこやぎ」の絵本がある。幼児は、幼い頃からおおかみには関心が高く、恐いイメージをもっている。しかし、この絵本に出てくるおおかみは、まぬけなおおかみで幼児には、とても親しみやすいおおかみである。「とんとんとん、おかあさんですよ」と、おおかみがドアをたたくと「おかあさんの声は、もっとやさしいこえだよ」などと、こやぎたちに言われ、おおかみはこやぎたちのお母さんになりきる努力をしていく。

その言葉のかけ合の中で、次々といろいろなイメージがわいてきて、想像が豊かになり、絵本の世界に引き込まれていく幼児である。

すると、いつの間にか自然に身体が動きだし表現遊びをしている。今までの恐いイメージのおおかみが遠のき近親感がみられ、おおかみの役になりきれる自分を演じている。

(3) 指導観

幼児が、登場人物の特徴がよく理解できるような絵本の読み聞かせをする。それぞれの登場人物の行動、歩き方、声、性格などについて幼児の発想を大切に受け止める。

最初は、これまでのように絵本の読み聞かせ方が単調にならないように読む。間の取り方やページのめくり方をうきうき、わくわくするような読み聞かせをする。

次に、あらかじめ用意した大型絵本を話の内容にそって壁面に貼り付けながら、読み聞かせをする。そのとき、おおかみの「とんとんとん、お母さんですよ」こやぎたちの「お母さんは、がらがら声じゃないよ」などと、言葉のかけあいをしながら、壁面を絵本の台紙とみたてての読み聞かせをしていく。言葉のかけあいを通して自分もやってみたいという意欲をかきたて、表現遊びへと仕向けていく。

その中で、こやぎは、七ひきだから七人だけなどと人数にこだわらずに、やりたい役をさせる。また、絵本の中の言葉だけにもこだわらず、子どもの発想からでた言葉も大切に受け入れ、絵本の枠にはめ込まずに、のびのびとその子らしさが発揮できるような助言や援助をこころがける。

そして、静かに聞けるような雰囲気作りを大切にし、演出方法を考え、絵本の読み聞かせ方を工夫することで、想像力が豊かになり表現力がつき、自分の思っていることや考えが言えるようにする。

最後に井戸に落されたおおかみについて話し合わせることで、みんなと仲良く遊べる糸口や、人間的な触れ合いを通して心が豊かになるような話を試みて、思いやりの心を育てる。

3 活動のねらい

・絵本に親しみ、先生や友だちと心を通わせ共通のイメージをもつことができる。
・自分の好きな役になりきって表現遊びに参加し、思っていることや考えていることが言えるようになる。

4 活動の内容

・絵本に親しみ、興味をもって聞き想像する。
・想像力を養いイメージを豊かにし、動きやことばで表現する。

5 保育の仮説

・絵本に親しみ、読み聞かせ方を工夫すれば、想像力が豊かになりイメージがふくらみ絵本からとび出して、その役になりきって意欲的に遊ぶことができるであろう。

6 幼児と相談した表現活動

(1) こやぎたちが遊んでいる様子。

庭でかごめかごめをして遊んでいる

(2) 留守番をお願いする様子。

母やぎ 「お買い物に行ってきます。おおかみがきてもドアを開けてはいけませんよ」
こやぎ 「おおかみってなぁに」
母やぎ 「体が黒くてがらがら声なの、きをつけてね」
こやぎ 「いってらっしゃい」

(3) がらがら声のおおかみ登場。

おおかみ「こんこんこん、お母さんですよ。はやくドアをあけておくれ」
こやぎ　「がらがら声は、おおかみだろう。あけないよ」
おおかみ「よし、きれいな声になってくるぞ」

(4) きれいな声のおおかみ登場。
おおかみ「こんこんこん、お母さんですよ。はやくドアをあけておくれ」
こやぎ　「きれいな声だから、あけようかなぁ。でも、手をみせて黒い手だ、おおかみだ。あけないよ」
おおかみ「よし、白い手足になるぞ」

(5) 白い手足のおおかみ登場。
おおかみ「こんこんこん、おかあさんですよ。はやくドアをあけておくれ」
こやぎ　「手を見せて、あっ！白い手だ。優しい声だしお母さんだ。ドアをあけようね。」
「あっ！おおかみだ」

(6) 森から帰ってきたお母さん。
母やぎ　「あら、ドアがあけぱっなし、わたしのこやぎたちはどこかしら？あっ！ちびちゃん。
みんな、どうしたの」
ちびやぎ「おおかみに食べられてしまったの」
母やぎ　「みんなを助けて、おおかみをこらしめましょう」

(7) おおかみが眠っているところに行き、はさみでおおかみのお腹を切り、こやぎたちを助ける。おおかみは起きて井戸へ向かう。みんなは、そっとおおかみを追っていき、おおかみを井戸へ落とす。

7　教材準備

絵本・・・グリム童話　絵本「おおかみと七ひきのこやぎ」。
お面・・・おおかみ・こやぎ・ちびやぎ・お母さんやぎ・他。
壁面・・・木・ドア・井戸・時計・家・大型絵本「おおかみと七ひきのこやぎ」・他。
その他・・靴下・手袋・スカート・エプロン・飴玉・他。

8　展開

時間	幼児の活動	教師の援助
導入 (14分)	ゆうな組へプレゼントが届く（演出） 絵本を見る。　（写①） 自分なりにイメージを広げる。 感想を話す。	・幼児の反応を見ながら声の抑揚、強弱、間の取り方に気をつけて読む。 ・幼児の言葉に心をとめ、思っていることが言えるようにする。
確かめ (9分)	話の筋をおって壁面構成に参加する。 言葉のかけあいを楽しむ。　（写②） 内容を理解し共通のイメージを持つ。	・自分もやってみたい、という意欲が持てるような言葉のやりとりを楽しませる。 ・思っていることを聞き出し、想像力を豊かにしていく工夫をする。
展開 (11分)	表現あそびをする。　（写③④） なりたい役になりお面をかぶる。 それぞれの役になりきって遊ぶ。 相手に合った受け答えをする。	・各々の希望にそって配役が決まるように見まもり、必要に応じて援助する。 ・一人ひとりの表現を大切に受けとめ、認め励ましたりする。また、言葉がつまったり、うまく言えない時は、そっと援助をしてある。
まとめ (13分)	思っていることや考えを話す。（写⑤） 楽しかったことや要望等を話す。 狼について思うことや考えを話す。	・幼児の思いや考えを引き出し、自分の言葉で言えるように援助する。 ・幼児の思いや考えがみんなに伝わるような話ができるように補足したり、なげかけたりする。 ・人間の心豊かさに目がむけられるような話し方を工夫する。
視点	興味や関心をもって聞いていますか。 楽しく表現遊びに参加していますか。 思いや考えが話せていますか。	評価：読み聞かせ方の工夫は見られましたか。

（ 絵本の読み聞かせ「おおかみと七ひきのこやぎ」写①）　（壁面を利用しての大型絵本・写②）

（表現活動「こやぎ達を呼ぶお母さん」写③「お腹がいっぱいのおおかみ達」写④）（思いや考えを話す⑤）

9　反省と考察

- 二回目の読み聞かせにしては、幼児は集中して聞いていたと思う。それは、図書館より郵便物が届いたという演出が、幼児に聞いてみようという、意欲をかきたてたのだと思う。
- 読み聞かせ方においては、声の抑揚、強弱、間の取り方、ページのめくり方などにおいてポイントをしぼって読み聞かせをすると、想像が豊かになり共通のイメージに深まりがみられることが分かった。
- 読み聞かせにおいて、幼児との言葉のかけあいを楽しむことで、絵本への興味や関心が高まり、絵本からとび出して遊んでみようとする、意欲がわいてくることが分かった。
- 表現活動においては、スカートやエプロン、お面、壁面などの教材を準備することで、幼児が自然に表現活動に参加できるようになることが分かった。
- 教師と信頼関係ができると、幼児は思いや考えが言えるようになり、友だちと楽しく園生活を送ることができるようになることが分かった。
- 表現活動においては、関心の高かったおおかみとこやぎのかけあいの部分を思う存分させるべきであった。表現内容を相談して決めたものの、幼児との意思疎通に欠け教師がひっぱりすぎた。もっと、幼児の思いや考えをじっくり聞き、やってみたい所を十分させてから表現活動をさせれば、一人ひとりの思いや考えがさらに、発揮でき意欲的に遊べたと思う。

Ⅵ　研究のまとめ

絵本の読み聞かせから、心豊かな人間性の目をつくることができることを確信した。心の豊かさは、物質的豊かさではなく、豊かな生活の中から生まれてくるのである。読み聞かせを通して得る想像力、言葉を媒体としたコミニケーション、幼児と親のスキンシップなどが、充実した園生活を創り出している。

充実した園生活を送るには、まずは、心豊かな幼児を育てることである。教師や友だちと心を通いあわせ、他人を思いやる心を日ごろの生活の中で育てることである。友だちが、頭が痛いと言った時、親身になって心配し「大丈夫？」などと、声をかけ頭をさわってみる仕草が思いやりの態度である。

次に、感動する心を育てることである。絵本を読んでもらっておもしろかった。また、読んでほしい。「○○ちゃん、お母さんに会えたかなぁ～」。「本当におおかみが来るかと思ってびっくりしたよ」。

などと、感動したことが言葉で言え共感し合えることである。

そして、みんなと協力する態度と意欲を育てることである。

人間関係の希薄な社会に育った幼児は、共通の目的にむかって協力することの意識に欠けている。友だちとコミニケーションをもちながら、やりたい活動を楽しませることで、対人関係がうまくなる。そして次第に、自分の思いや考えが言えるようになり、相手の思いや考えもわかるようになる。

そのなかで、自己中心的な考えから自己抑制し、友だちと協力し共通の目的にむかって活動する楽しさを感じることができてくる。そうなると、一人ひとりの幼児が充実した園生活を送ることができるようになり、心が豊かに育つのである。

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

1　成果

- 豊かな心を生みだす背景には、絵本の読み聞かせを通して、人間的な心の触れ合いを大切に、情緒を育てることが重要であることがわかった。
- 豊かな心を育てるには、家庭での心豊かな教育力が基礎となる。そして、地域、園の連携が大きく左右していることがわかった。
- 絵本は、心の栄養である。人間的な心の触れあいがもて、間接経験をするのにふさわしい教材であることを改めて認識した。
- 絵本は、想像力やイメージを豊かにする。語いを豊富にし友だち関係を広げ、自分の思いや考えが言えるようになる。さらに、環境を整えてあげると、表現活動において友だちと共通のイメージをもち、目的をもって遊ぶ楽しさが味わえる教材であることがわかった。
- 幼児にとって壁面構成などの魅力的な環境が、活動意欲を高め、生き生きと活動する活動源となることがわかった。活動を通して見られる人間的コミニケーションの深まりの中から心情、意欲、態度が育つことがわかった。
- 充実した園生活は、自分が受け入れられているということで、心が安定し、教師や友だちと一緒にやりたい活動をさせてあげることである。共に活動していく中で、喜びや楽しさ、悲しみや苦しみを分かちあい信頼関係を築くことである。そうすると、充実した園生活を送ることができるようになることがわかった。
- 教師は、できるだけ幼児の言葉を肯定的に受け止め、一人ひとりとの、心の触れあいを大切にし、信頼関係をもつことである。そうすると、幼児が自分の思いや考えが言えるようになり、園生活を楽しく送ることができるようになることがわかった。
- アンケート調査で、家庭での読み聞かせの時間や父母の絵本に関する意識をとらえることができた。父母と教師間において、絵本に関する教材性の共通理解をすることができた。また、クラス便りを通して、一冊の絵本をとりあげることにより園と家庭とに共通の話題ができ、共に考える中で、心の豊かさについて深まりがもてることがわかった。

2　今後の課題

- 家庭や地域との連携をとりながら、人間性を豊かにしていく方法を探っていきたい。
- 絵本のもつ教材性が最大限に生かせるような研究を深めていきたい。
- 絵本の読み聞かせから、豊かな感性を育て、言葉や身体で伝え合う意欲や想像力を育てる援助のあり方を探っていきたい。

＜主な参考文献＞

岡田正章監修　『絵本・童話』　チャイルド社　1978年

押谷由夫　『初等教育資料』　東洋館出版社　1997年
－豊かな人間性をはぐくむ教育の推進－

尾田　幸雄　『教職研修』　教育開発研究所　1998年
－心を育てるための留意点は何か－